

◆ 基礎情報

計画名	PBL型演習（地域看護診断演習）におけるリーダーシップ教育
実施責任者	看護学部准教授 清水信輔
対象者	看護学部2年生 96名
実施期間	2025年4月1日～2026年3月31日

◆ 取組み概要

看護学部では、看護師・保健師としてのキャリアを目指す学生が大半であり、将来保健・医療・福祉の分野で広く活躍することが求められる。多様化・複雑化する保健・医療・福祉の現場において、チームや多職種・多機関と協働して看護実践を行う上で、共立リーダーシップの要素を習得する意義は大きい。そのため、本学部でも各科目で学生のリーダーシップを意識した教育が行われている。一方、全授業を通じてPBL型演習を展開している科目はほとんどなく、また全学のPBL型のリーダーシップ教育科目も必修科目が多く参加しづらいといった状況もある。このような中、2年次必修「地域看護学援助演習」は全14回の授業を通じてPBL型演習を行う科目であり、2023年度より、リーダーシップ開発の枠組みを取り入れた試みを行っている。本年度は、2024年度共立リーダーシップGPの実績を踏まえたプログラムの実施を通じて成果と課題を分析し、より効果的なプログラムを検討した。

◆ 取組み全体の流れ

- **対象：**看護学部2年96名 全24チーム（1チームあたり4名）とし、麴町地域（母子6チーム、高齢者6チーム）、神田地域（母子6チーム、高齢者6チーム）のチーム編成とした。
- **授業内容：**チームごとに千代田区を対象に地域や生活する人々の現状を把握するために、既存のデータ分析、地域のキーパーソンへのインタビュー、実際に地域を歩いてまちと人々の様子を観察する地区踏査の実施、それら分析結果に基づき、暮らしやすく健康なまちとなるために必要な活動、支援策の計画を行う。
- **リーダーシップ開発の取組み：**本プログラムでは、ここに学生各々のリーダーシップを向上させることを目指し、リーダーシップ開発の枠組み（図1）を取り入れたプログラムを実施した。加えて、本年度は、2024年度の振り返りをもとに、全ての授業回の授業開始前に、その回の学習内容を伝えた上で、自らのリーダーシップ目標を意識できるような声掛けを行い、意識づけを行いながら演習を進めた。

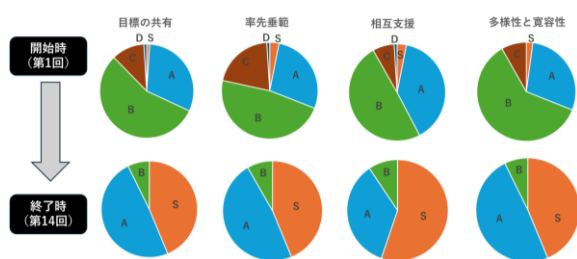
図1 本プログラムにおけるリーダーシップ教育の取組み

授業回	授業内容	個人	チーム
1～2	オリエンテーション コミュニティ・コアの目指す姿 地区データの収集・分析	●個人目標の設定 【様式0-1:リーダーシップ目標設定シート】	●チームのコンセプトとルールの設定 【様式0-2:チームの方針・ルール作成シート】
3～9	保健師の伝える健康課題と支援の実態 （千代田区保健師による講義） 地区踏査・インタビュー計画・実施	リーダーシップの発揮	アイスブレイクの実施 チーム対抗ゲーム
10	健康課題の具体化と改善案の提案①	●個人目標の再設定 【様式0-1:リーダーシップ目標設定シート】	●チームのコンセプトとルールの再設定 【様式0-2:チームの方針・ルール作成シート】
11～13	健康課題の具体化と改善案の提案② 発表資料の作成	リーダーシップの発揮	
14	成果発表会	●チームメンバーから個人へのフィードバック ●個人目標の達成度評価 【様式0-3:リーダーシップ自己評価シート】	投票により最優秀 コミュニティアセスメントアワード2025

◆ 取組みの成果

- 「地域看護学援助演習」のPBL型演習にリーダーシップ教育を取り入れることで、学生たちはチームワークを通じて、個人及びチームで定めた目標達成に向けて、チームメンバーと協働しつつ、主体的かつ積極的に取り組み、リーダーシップの力を育むことができていた。
- リーダーシップの4要素の平均得点をみると、全ての要素で演習前後の平均値は有意に上昇した。昨年度は全ての要素で上昇したもの、いずれも1ポイントに満たないものであったが、本年度は、いずれの要素も演習前後で1.1～1.2ポイントの上昇が認められた。

演習開始時と終了時のリーダーシップの変化（2025）



演習開始時と終了時のリーダーシップの変化(2025)

	開始時（第1回）	終了時（第14回）	p 値
目標の共有	3.19 ± 0.69	4.36 ± 0.62	<0.001
率先垂範	3.11 ± 0.81	4.35 ± 0.63	<0.001
相互支援	3.35 ± 0.71	4.46 ± 0.66	<0.001
多様性と寛容性	3.25 ± 0.63	4.36 ± 0.62	<0.001

S：5点、A：4点、B：3点、C：2点、D：1点
Mean ± SD、対応サンプルによるWilcoxonの符号付き順位検定

◆ リーダーシップ教育に関する実践

共立リーダーシップの意識づけ、目標設定の活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 共立リーダーシップの意識づけとして、初回での説明ならびに、中間での見直しに加え、今年度は、その回の学習内容を伝えた上で、リーダーシップ目標を意識できるような声掛けを行い、演習でのワークをリーダーシップの観点から捉えやすくなるように工夫した。 ● 目標設定として、「リーダーシップ目標設定シート」「チームの方針・ルール作成シート」を用い、初回（第1回・第2回）に個人の目標設定、チームの方針・ルールを決定し、中間（第10回）に見直しを行い、それぞれ各チームごとに共有・検討を行った。またそれを踏まえてチーム内の役割分担も促した。
協働活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 全14回を通じ、千代田区の対象地域、高齢者・母子ごとにチームを編成し、既存資料からの情報収集、キーパーソンインタビュー、地区踏査の計画・実施を通じ、千代田区の現状把握、健康課題の分析、改善策の提案、成果発表会までチームごとに協働活動を行った。 ● 模造紙や付箋、マーカー等を用いてコミュニティコアの目指す姿と関連要因、必要な情報の整理を可視化しながらチーム内で意見を出し合い、内容を検討できるように工夫した。 ● 教員が6チームずつ受け持ち、各チームの地域看護診断ならびに、チームワークが円滑に進むような声掛けも行った。また担当チーム以外も相談に乗る等、柔軟に支援を行った。
共立リーダーシップの観点での振り返り	<p>最終回に以下の振り返りを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● チームごとにチームワークでの各メンバーの具体的な行動や発言を挙げ、それがどのようにチームの目標達成やチームメンバーに影響を与えたか、メンバー同士で各々フィードバックを行った。 ● 上記のフィードバックを踏まえ、「リーダーシップ自己評価シート」を用いて、本演習で設定した目標をもとに自らのリーダーシップの振り返りを行い、今後の目標を明確にできるように工夫した。

◆ 学生の成長に関する総括

- 上記のリーダーシップ教育の実践を通して、チームや個人によりばらつきはあったものの、演習を進めるごとに多くのチームで役割分担や時間管理を行い、目的を明確にしながら取り組むようになっていた。
- 演習前後のリーダーシップの変化をみても、4要素ともに授業前にみられたB・C評価が授業後には大きく減少し、S・A評価が約85～95%を占める構成となった。目標設定で多くの学生が課題としていた「率先垂範」や「多様性と寛容性」も同様に評価が高まっており、レポートでも多くの気づきや学びが得られていた。
- 昨年度の反省を踏まえ、授業回ごとに、学習内容の説明後、ワークブックでリーダーシップの目標を確認した上で演習を始めたこと、得意な部分を伸ばすだけではなく、苦手な部分にもチャレンジし、自身のリーダーシップの幅を広げていくことができるように働きかけを行ったことも、学生たちのリーダーシップを高めることにつながったのではないかと考える。

◆ 取り組みを通じた全体の所感

本科目は、全14回を通じたPBL型演習科目であり、チーム単位で行う地域看護診断を通じて、人々のQOL・健康と地域の環境特性との関係をとらえることや、住民・多機関と連携して行う地域看護の役割について学ぶことを大きな目的としている。昨年度・今年度と、学生たちの演習への取り組みを目にする中で、多くの学生たちが、チームメンバーと協働し、主体的かつ積極的に地域の現状把握や分析、改善策の提案といったワークに熱心に取り組む様子が印象的であった。そして、学生のレポートに目を通すと、地域看護への関心や理解の後押しにもなっており、本プログラムは、リーダーシップ力を高めるだけではなく、本科目の到達目標の達成する上でも意義のあるものだと考える。昨年度、課題となっていたリーダーシップの意識づけ等についても、学生自身がそれぞれのフェーズにおいて、どのように役割を果たすことかを考える機会をもつことが重要であることを実感した。今後も、本プログラムを通じて、地域看護への関心はもちろん、学部生のリーダーシップの力の向上に寄与できるように内容を改善・検討しながら取り組みを進めていきたい。

◆ 今後の展開

本年度より、1年次後期に一般教養科目(必修)として「課題解決のためのリーダーシップ入門」がスタートした。当該科目は、教養科目におけるPBL型のリーダーシップ教育であり、次年度からこの履修者が本科目を履修するため、専門科目としてこれまでPBL型演習に取り組んできた「地域看護学援助演習」とのつながりが課題となる。次年度は、1年次の当該科目とのつながりを踏まえつつ、本科目でのPBL型演習にどのようにつなげ、展開していくことが効果的かを改めて検討し、よりよいプログラムを企画・実施できるようにしていきたい。